

原爆音楽の軌跡

第四期（1977～85）

この時期は、前の時期に分裂した原水爆禁止運動が再統一され、国連への核兵器禁止要請署名運動が始まった時期である。また、社会的には、被爆体験の国際化が指摘されているが、音楽の分野でもそのような傾向を顕著に見ることができる。例えば、英国の詩人、エドモンド・ブランデン（元オックスフォード大学教授）の「ヒロシマ1949年8月6日に寄せて」という詩を合唱曲にしてほしいという広島市からの要望にこたえて、英国の王室付作曲家マルコム・ウィリアムソンが作曲し、それを広島の児童合唱団が初演している。ブランデンは駐日英国大使館教育顧問として来日中、48年に広島を訪れ、目に焼きついた印象を詩に託し、同49年広島市に寄贈している。寿岳文章により「ヒロシマよりも誇らしき 名をもつちは 世にあらず」と翻訳されたこの詩は、すでに山田耕筰や地元エリザベト音楽大学のホセ・テホン元学長の手によっても作曲されている。テホン元学長の作品は、81年2月に広島を訪れたローマ法王ヨハネ・パウロ二世からの要請で実現したもので、同大学の定期演奏会で披露された。また、広島市に寄贈されたまま13年間眠り続けていたドイツの作曲家フォレストのオペラ《広島の花》が、地元の演奏家の力で初演されたり、イタリアの指揮者アバドが、ベルリオーズの《幻想交響曲》の録音に際して、終楽章に広島の式典で用いられる「平和の鐘」を使用したのも話題をまいたところである。米国の著名な指揮者バーンスタインが、被爆後40年にあたる85年、14カ国の音楽家、楽団員400名とともに広島を訪れ、自作の交響曲第三番《カディッシュ》や糺場富美子作曲の《広島レクイエム》などを演奏して、自らの音楽家としての信念を明確に示したことも忘れられない。同氏はアテネ、ブタペスト、ウィーンでも同様のコンサートを企画し、一連の旅を自ら「祈りの旅」と称している。

さらにニューヨークでは、第2回国連軍縮特別総会を前にして、反核・軍縮を訴える音楽祭「日本の音楽の夕べ」が開催され、《原爆を許すまじ》を初めクラシック、ポピュラー、邦楽などの原爆音楽が演奏されている。ただし、そのとき報じられたアメリカ人が会場に少なすぎるという実態はどう捉えればよいのであろうか。軍縮総会に刺激され、自ら室内楽を結成して平和コンサートを開いたジュリアード音楽院教授のピアニスト、井上和子も自らの人脈を頼って、個人レヴェルで原爆音楽の紹介に努めている。このシリーズは後数回続くが、この会ではアメリカの作曲家デヴィッド・ローブの《琴とバイオリン、ピアノのための三曲》が初演された。そのほか、栗原貞子の詩に、ドイツ人のツィーマンが曲をつけた《ヒロシマというとき》が広島で初演されたり、日本語の反核ソング《無数のヒロシマ》がインドネシアで流行したり、アメリカのフォーク歌手シャーリン・ゲッディスが作詞作曲した《ヒロシマ》《二度と再び》が披露されたりしている。これらは一様に国際的広がりの中で反戦、反核、平和を訴え、ヒロシマの心を世界に発信するねらいを持つ点で共通している。

この時期にも新作が相次いで登場している。中でも大きな話題をまいたのは、オペラ《はだしのゲン》の広島・沖縄公演の成功である。中沢啓治原作、清水高範台本、保科 洋作曲による二場六幕のオペラは、被爆都市としての広島の印象を強くアピールすると同時に、子供から大人まで理解しやすい平易な内容で大きな成功をもたらした。これに続いて東京では、《おこりじぞう》がオペラ化され話題をよんでいる。

そのほか注目すべき作品として、林光の《新原爆小景》、尾上和彦のオラトリオ《ヒロシマ》、本間雅夫の《八月の歌》シリーズ、などが挙げられる。尾上の作品は峠三吉、林の作品は、前シリーズ同様、原民喜の原爆詩に基づいている。

地元広島の音楽活動としては、前の時期に始まった「広島平和音楽祭」が中央からポピュラー界、クラシック界の大物スターたちを呼んで順調に回を重ねている。毎回テーマを決め、一般から歌詞を公募して賞を贈るなど、企画も凝っており、多くの聴衆を魅了したのもうなずける。このシリーズから新作が次々と生まれ、後々歌い継がれているものも少なくない。故芝田進午を代表とする「原爆犠牲者にささげる音楽の夕べ」もこの時期に始まっている。こちらの方は原爆音楽の系統的な紹介が大きな特徴で、ようやく原爆音楽に対する意義が明らかにされ、学究的な取り組みが始まったといってもよい。一方、東京では、芥川也寸志の呼びかけによる「反核・日本の音楽家たち」というコンサート・シリーズが始まっている。邦楽、クラシック、ポピュラーの分野にわたる幅広い原爆音楽が紹介されているが、広島でも「広島国際平和コンサート」という名称で開催された。

参考文献

- 原爆被災資料広島研究会『原爆被災資料総目録』第二集 原爆被災資料広島研究会 1960年
- 中国新聞社編『年表 ヒロシマ～核時代五十年の記録～』メディア開発局出版部 1995年
- 『中国新聞項目別記事索引』昭和49年7月～平成10年7月 中国新聞社

(原田宏司・広島大学名誉教授)